

「探究学習・調べる学習ひろば」参加者のコメントから_5

7月5日(土)20:30~22:00に実施された「探究学習・調べる学習ひろば」の第5回は、30名がライブ配信に参加、事後アンケートに7名が回答して下さいました。以下、配信中のチャット質問も併せて抜粋引用(青文字)するとともに、簡単な回答・コメントを記します(※…片岡 / ★…山崎)。

資料置き場@GoogleDrive

- ・配信の音声アーカイブ & 配布資料はこちら→([アーカイブ配信/資料置き場](#))
- ・清教学園の卒論テキスト、生徒作品サンプルはこちら→([探究大全基本資料](#))

テーマが決まらない生徒の葛藤 / オープンダイアログによる研究支援

前回の「テーマが決まらない生徒のこと」のお話ありがとうございました。南先生のお話にあった「決まらない、本読めない、進まない」をくり返すモチベ低い生徒は、「いるいる!」と思いながら興味深く拝聴しました。また「提出できなかった生徒はどう評価するのだろうか?」と思っていたので、お話と「参加者のコメントから_3.pdf」に公開していただいた評価基準を見て、腑に落ちました。本校は小規模校で、本格的な探究は今年始まったばかりです。探究学習の成功例も失敗例も、勉強になります。次回もみなさんのお話を、楽しみにしています。ジングルは、「C」が一番好きです。(公立高校学校司書)

※「学習観」つながりでいうと、「決まらない、本読めない、進まない」生徒の世界を上手く理解できていないな、といつも思ってきました。延々そう感じてきたのですがある時、オープンダイアログの本(斎藤環ほか(2021)『まんが やってみたいくなるオープンダイアログ』医学書院)に出会い、「ここに突破口があるかも」と感じました。スタッフの人数分買ってみんなで読んで、実際に決まらない生徒とオープンダイアログをしています、そのあたりはまた機会を作ってお話したいです。



★論文を書いて提出するという課題的な「成功例」は、授業なので当然目指します。一方で、テーマが決められなかった、うまく成果物にまとめることができなかった、という一見して「失敗」に見える経験もまた、生徒には大事な学びなんです。テーマを決めて学ぶこと、それ自体が授業の目標なので、自分はテーマを決めることができなかったという振り返りができた時点で十分かなと思います。

そうした生徒が自己分析で「今の自分には、自分で自分のテーマを決める経験は早かったようだ」とよく語るのですが、この先自分でテーマを決める機会って人生の重要なポイントで必ずやってくるので（公立校の生徒ならそれって「高校受験」なんですよ）、ここでの経験を活かしてほしいなと思っています。それがきっと、彼ら自身が自分の人生を自分で歩むことになると思うのです。

片岡先生が挙げられた「オープンダイアログ」が凄いいいです。ちょうど3年生の4月から7月にかけて、テーマに悩む生徒が放課後によくやってきます。友達と一緒に来てもらって、「指導」というよりも語り合いの体で色々喋ります。最近では、卒論の相談に来た生徒に頼んで音声データを記録させてもらい、AIでまとめています。自分でテーマを決める生徒の赤裸々な悩みが可視化されて面白いです。

※ オープンダイアログは精神医療の方法論ですが、片岡が探究学習をはじめた時期（1990年代）に強く影響を受けたのがカール・ロジャーズでした。ロジャーズは来談者中心療法(Client-Centered Therapy…カウンセリング)の創始者として有名です。教育についても著作があり『創造への教育（上・下）』（岩崎学術出版社、1972年）を熱心に読んでいました。ここにきてオープンダイアログがヒントになったのは、「来談者（子ども）中心」という意味で平仄の合う展開だったと思います。この2冊今でも中古で出ていますから興味があればぜひ。



文学研究の難しさ

今回も面白い内容でした。中学生の調べ学習に対する取り組み状況は、知らない部分もあったので、参考になりました。文学は読むだけであれば楽しいのですが、学問として捉えるとなかなかとつきにくい部分でもあったり、たしかに！と感じる部分がありました。前半のオネエ言葉については、考えたこともなかったので藤田さんの話は、勉強になりました。また、次回のテーマも楽しみに聞きたいと思っています。ありがとうございました。（公立図書館館長 司書）

※作品論の難しさについてはテキストの「『進撃の巨人』はなぜ魅力的なのかに本気で答える」の項目をご覧ください。（→山崎註：テキスト p.117 [探究大全基本資料](#)）文学だけに限らず、映画でもアニメでも漫画でも舞台でもゲームでも…。作品論には読解力と筆力の両方が必要になりますね。岩明均の『寄生獣』を研究したいという高校生がいたのですが、「寄生獣について書かれた資料を読む」がクリアできず諦めました。しかし、なかには話題になったスポーツ小説を題材にした高校生のように、書き上げてくれる生徒も出てきます。

★文学に限らずアニメ、ゲームも同様、楽しいだけの世界の「次」にいけるか、というのがポイントです。論文になるためには何らかのテーマ設定が必要ですが、好きなものを調べて並べた次のステップ＝「分析」への移行が求められ、それが中々難しいんですね。動機はあってもリテラシー的な部分で太刀打ちできなかつたりしますし、「ただ好きなだけだった」という消費的な好きに気が付いたり。高校生になると、人文科学や社会科学的な教科学習とも結びついて、ちょっと太刀打ちできる生徒も増えて

くる気がします(データ無いですが)。それが難しい生徒は、目に見える数字の世界と、好きな分野を結び付けて語りますね(売り上げ統計とか)。

※関連して以前こんなスライドを作ったのを思い出しました。上はゲームや焼肉やラーメンや文房具をただ「好きで消費して楽しく満足して終わる」グループ。もう一方は、そこから突き抜けて「自分事として何かしらの問題を見出して、穴を掘って(探究して)論文化する」グループ。生徒にはこのスライドを見せて「あなたは一体どっち?」と聞いております。上のグループに留まる生徒は「好きなものでも卒論のテーマにすると嫌いになる」と言います。



探究学習の動機付けは「自分ごと」

文学研究は中学生には難しい、というお話でしたが、そうだろうなあと思います。これまで何回か出席してお話を伺った印象では、テーマについていかに自分事として考えられるようになるかが探究を進めるキーになっているような気がします。自分の生活や将来に関わりがあったり、自分が好きなものであったりすると考え続けられるのかなと(でもキャラが好きだけじゃダメなんですね)。

大阪弁に興味がある人が多いのは、さもありなんと感じます。「笑い」の分析のために自分なりに方法論をつくって取り組んだ人がいるというのは、頼もしい!と感じました。役割語については、SDGs関連でジェンダー平等とかの考え方が浸透してくると、成り立たなくなる可能性もあるかとも思いました。翻訳家の方から聞いたお話ですが、トランスジェンダー女子の言葉をどう訳すか、とても悩まれたとのことでした。その人物の描かれ方を考慮して、女性らしさを出さずに一人称を「自分」にしたり等工夫したとのことでした。役割語を使うとかえって紋切り型になってしまい、不具合が生じるというケースです。オネエ言葉を話す人も、実際はトランスジェンダーであったり、じっくりくるから使ったり(尾木ママみたいに)とか、いろんな背景の人がいるはずですね。役割語を研究することで、社会での偏見とか思い込みにも目を向けられる生徒が出てきてくれたらなあ、と思います。(学校司書モデルカリキュラム受講生)

※おっしゃるように「自分事」にもとづいた題材を選べるか否かが、探究学習を「探究」にできるかどうかの分水嶺なのかもしれません。実は、探究学にはふたつの「穴」を掘る必要がある、と思っています(探も究も穴かんむりです)。ひとつは世界に向けて穴を掘る。つまり、本や資料や現実世界の扉を開けて、その世界にむけた穴掘り。もうひとつは自分に向けた穴掘り。というのも、「自分は何を学ぶのか」という問いは、同時に「自分は何者なのか」という問いでもあるからです。つまり、探究学習は「自分はこんなことに興味がある」、という気づきに応じて、世界のどこかに向けて学んでいくものなのです。ところが、学校の多く授業では、自分に向けて穴を掘れません(そんな余裕はないので

す)。だから、先生に「ここ掘れ」と言われて穴を掘る。とはいいいながら、中には自分の興味に結び付け、そうした授業を納得して楽しく学んでいく子どももいます。自分ごとに引き付けていけば社会や国語などの授業や大学の講義は大好きでした。が、そうすべての科目でうまくいくわけではありません。数学や英語は努力はしましたが…('◇')。そまた中には、「解答にいち早くたどり着くこと」をゲームとして楽しめるような動機付けがあって、がんばれる子どももいるかもしれません。そんな「学習観」で乗り切ってきた生徒にしてみると、探究学習はたしかに「反則」かもしれません。

「自分堀りなしの学び」がことごとくダメというつもりはありません。さはさりながら、学校では自分に向けた（「自分事」の）学びを見出す機会があまりにないのです。そんななかで、進路を考えるのですから無茶と言えば無茶なのかもしれません。

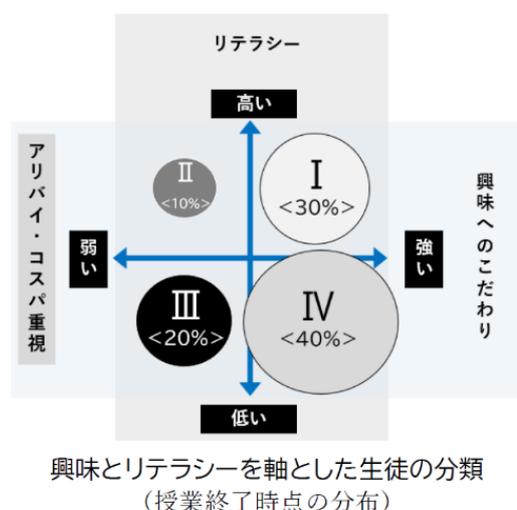
★第3回配信の「4象限」とも関連しますが、「自分ごと」の分野を選んでいる時点で探究学習的にはクリアかなと思います。少なくとも、象限の右側、第1・第4には分類されるのです。ただ、研究論文のような成果物はそこに加えて「リテラシー」が求められるので、文学好きの生徒の多くが第4象限から第1象限に移行できない困難があります。好きな太宰をどういった研究テーマで扱うか。そのテーマで自分自身が太宰を読めるのか。まあそれが難しい。大人だって難しいです。だから、まあいっぺん挑戦してみて、「自分に文学研究は早かった」（あるいは、ただ好きなだけで研究したいほどではなかった）と気が付くのも、それはそれで大事な経験かなと。

そうした文学研究の難しさに比べれば、言語学研究ははじめから「不思議」が研究対象になりやすいので、文学研究のような悩みとは無縁なのかもしれません。おっしゃるような社会背景とも結びつくと、またテーマは深まっていますね。

「テーマ変えたい」はよい知らせ / 生徒のテーマ修正に教員はどう関わるか

お世話になっております。今回視聴して、テーマを変えていくことがあり“で、変えたからこそ探究がうまくいくケースがある(むしろ多い?)ことがわかりました。そこで質問なのですが、生徒の研究テーマでうまく続けられないという判断は、先生の方でされるのでしょうか。それとも、生徒の方で気づくまで待つのでしょうか？そして、どの段階でもテーマ変えは、受け入れているのでしょうか。また、変えて良くなった具体例などをお教えいただけるとありがたいです。本校は、その柔軟性がないように思います。どちらかという「初志貫徹」の指導方向で、生徒もうまくいなくても力業で続けてしまうことが多いようです。(私立高校学校司書)

※そうですね、高校の授業で統計をとったらたしか6割は題材ごと変えていて、そのうちのさらに何割かは3回も4回も、時には7回くらい変えていたと思います(七転び八起き!)。とはいえ、「変えるべきでなかった」と振り返る感想は読んだことがありません。やっぱり「テーマを変えたいはよい知



らせ」だと思えます。「初志貫徹」…？そんな無茶な(*'▽')。海が荒れてきて嵐がくる予感がするなら、進路は変えるものではないですか。「初志貫徹」もまたある種の学習観ですね。どこで育てたんだろう…。

「続けられない」判断は、基本自分で決めるように言っています。「自分のなかで『面白くない・退屈だ』と感じたらやめよう」とは繰り返し授業の中で言ってます。たとえ、それが提出直前でも。

「やめた方がいいよ」と直接言う場面もあります。一度決めたテーマにいわば「居ついて（内田樹的な…）」しまっている生徒は、「やる気もないけど、やめたらこれまでの入力もったいない」と感じている場合が多いようで、そんなときは「ここ何時間か見てたけどつまんなそうに見えるよ。手が動かないのはこのテーマを体が嫌がっているからじゃないの？」などと言ってます。

★片岡先生も詳しく書かれていますのですが、判断自体は生徒に委ねています。ただ、こちらの言葉かけのニュアンスも色々あって。たとえば「明らかに本を読む元気がない」生徒に対しては、色々和研究の動機を聞いた上で何も出てこなければ「そりゃやめた方がいいね。さっさとやめよう」くらいの言い方をします。一方で、色々付箋を貼って読書ができていれば、「この先○○のような難しさはあるけど、やってみてダメだったらまた教えて」とか、「例えばAやBのようなテーマの方向性があるけど、あなたの研究動機と対応するのはBで、そういったテーマの方向性はどうだろう？」など言ったりします。目の前の生徒がどのように悩んでいるのか。それが分野選びからヤル気ナシなのか、あるいはテーマの方向性で悩んでいるのか、専門知識に太刀打ちできない難しさなのか、などによって声掛けのニュアンスを変えます。対象の生徒と僕自身の関係性なんかも、なんとなく考えます。

こちらが誘導しないように気を付ける、生徒の心に少しでも火があるならそれを消さない、でも太刀打ちするのが難しそうなら別の在り方も提示する、そもそも火がないならちょっとキツめの言葉もかける…そんな感じです。生徒の内にはじめから強烈な意志があり、それを初志貫徹でやるなんてことはほとんどないんですね。色んな本と出合ったり、FW 経験の中から「だんだん自分ごとになっていく」というケースが多いので、そのあたりのニュアンスが授業者の指導方針として共有できればいいですね。

「ひろば」らしくなってきた嬉しいです

今回は、実際に探究学習をされた方のお話を伺うことができ、よかったです。また、参加者の方々がチャットで本の紹介をしてくださったのも、よかったです。みなさん博識で、驚いています。本棚の写真に加え、動画もありありがとうございました。いつか機会があれば、見学をさせていただきたいと思いました。(私立高校学校司書)

※もう、リブラリア見学はいつでもどうぞ（と、退職者が勝手に言ってはならない）。これからもなるべく本棚をお見せしたいです（と、退職者が勝手に言ってはならない）。

探究学習（的な）学習経験は、かなりの方にあるのではないのでしょうか。たとえば大学の卒論でも、ちょっと不安になるのは卒論でさえ「探究させられ学習」という方がまたいるのも事実なのです。先生にアンケートを取ったら「そんな経験はない」と言われたこともあります。そうとなれば、いまからでも小さい規模でも、探究学習を経験していただこうと思って、あちこちでワークショップをしてきました。そんな話もどこかでしたいです。

★今回はリスナーの皆さまも色々和本を紹介して下さって嬉しかったです。「ひろば」らしくなってきました。レファレンスインタビューや研究支援のノウハウというのは、属人的な技術になりがちですが、一方で共有知として図書館員や教員が互いに補完しあうことも可能だと思います。僕ら3名も、よく生徒への学習支援を話し合っていました。教員もまた、互いに専門分野や興味関心が異なるので、「この前はあの子にこんなアドバイスしたよ」というのが大変参考になるんですね。チームで授業することのよさでした。この「ひろば」も、働く現場こそ違えど、そうした共有の場になったらいいなと思っています。見学もいつでもどうぞ。だいたい、年間100名近くお越しになられます。いつでもだれでも歓迎です。

話し方が人に与える影響 / 山崎の娘が寝てくれない

南先生がお休みだったのは残念でしたが、ゲストの藤田先生のお話を聞くことができ、とても有意義な時間でした。ありがとうございました。藤田先生のオネエ言葉の研究のお話を聞き、私の知り合いの男性の先生を思い出しました。その先生は特別支援教育に携わっており、発達障がいの子どもたちに自分の思いを伝えるため、話し方を工夫する中でそのような話し方になったそうです。話し方が人に与える影響について考えさせられました。そんなことを思い出しながらお話を聞かせていただきました。中高生の頃に何かに真剣に向き合う経験は、かけがえのないものだと改めて感じます。それが直接大学受験や就職に結びつかなくとも、きっとどこかで何らかの形で生きてくるとと思います。

密かに山崎先生のお嬢様が画面に登場されるのを楽しみにしています(笑)。ジングルはどれも素敵だったので、3つを順番に使っても良いのではないかとふと思いました。(小学校教諭)

※発達障がいの子どもの話、そんな方法論があるかもしれませんね。比較になるかわかりませんが、オネエ言葉のお店で女性がくつろげるのも(と、体験したかみさんが言った('◇')◇)、そんな工夫が結果として練られてきたのかもしれません。

ジングルに加えて、娘さんのタイトルコールが入ると楽しいね、という話をしていますが、それは娘さんのご機嫌次第でしょうか！ 多芸な柏原さんは、ひそかにひろばのイラストも描いていて、それがお目見えするチャンスもある…かも？

★なるほど勉強になります。「オネエ言葉」があるなら男性性的な喋り方もありますよね。大阪大学の金水先生は「役割語」という概念を用いましたが、男性性としてのジェンダーロールをまとった役割語もあるのでしょうか。学校での生徒に対する言葉選びでも、よく意識させられます。そうした喋りのイメージが特別支援学級の生徒への働きかけで障害となるなら、まさに「状況に応じて喋り方を選ぶ」というのは理に適っているのかも。多様性の中で自分がどう在りたいか、というよりもその時々状況に応じて自分がどういった印象を求め、役割語をまとうか、とでも言えるのでしょうか。

あんな時間に3歳児が起きてるのもどうなのかなと思うのですが、本当に寝ない人で…。「ひろば」の日に限らず、親が何かしてるとかでもなく、10時くらいまで寝てくれません。視聴の邪魔になっていつも申し訳ないなと思う一方で、楽しみにして下さっている方もいるのはありがたいです。

コスバ重視の Web 利用の背景には、教育観と学習観

前回の「参加者からのコメントから」で付箋のたくさん貼った写真を拝見し、たくさんの本を使った授業をされていることに驚きました。調べ学習で本を使わず、ネットだけで調べることが多いのですが、「なぜ本から情報を得ないといけないの」というコスバ重視の声に、どう答えてらっしゃいますか？もちろんネットと併用だと思いますが、「ネットだけ」ではだめなのか。基本的なこと、すでに語られているとは存じますが、改めてお伺いしたいです。(公立高校学校司書)

※うーん…。これはありそうな声ですね。ネット利用とコスバ重視は分けて考える必要があります。問題なのはコスバ重視ですね。端的に言えば「『コスバ重視』の探究？研究？のなにがおもしろいの？」でしょうか。あるいは「コスバでアライバイ作ったところで楽しくないから」でしょうか。もしくは「自分を揺さぶるような学びは、ネットの中の『正解』探しでは得られないから」かな。もっといろいろ理屈はこねられますが「コスバ重視」の方に、こう言って反応見てくれませんか('◇')。考えられる返答は先生だと「大変（わからないわけではないけれど、探究学習にそんな労力はかけられない）（自分はやりたくない）（やったことがない）」かもしれませんし、生徒だと「めんどい（やりたいことなんかない）（本気で学ぶなんてリスク高すぎ）（そんな授業は「反則」）」かな…。返事はいろいろな変化球で飛んできますが大筋そんなところかも。

もちろん、題材が自由で本がないなら、ネットを活用するのは当然あります。それでも、ネット上の百科事典（Japanknowledge とか）や電子書籍や pdf の論文を読む必要がでてきます。紙の本を活用しないのはそれこそコスバ悪いですよ。

★ご質問ありがとうございます。清教学園で使用している「卒業論文のテキスト」最新版を、GoogleDrive で共有します→([探究大全基本資料](#))こちらの p.49 に、「どうしてネットではなく本なのか」という見出しの授業教材があります。また、p.57 に「Web で文献を探す」もあります。この 2 ページが清教生によく言う説明です。

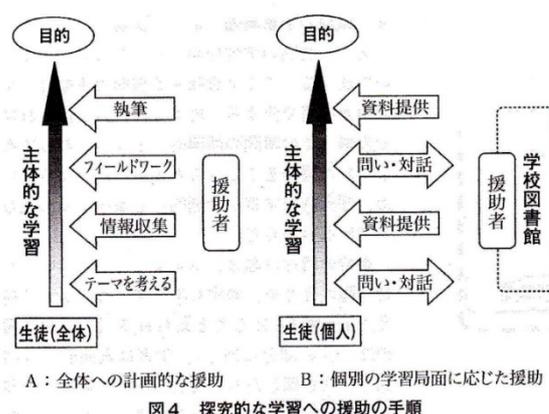
ただ、こうした教科書的な理由説明がある一方で、図書や図書館の意義は「生徒のテーマ設定のいたりきたりに付き合ってくれる」という点が一番大きいと思っています。ネットは鍵のついた百科事典です。自分で検索キーワード(=鍵の言葉)を選べないと、知っていないと、自分に必要なページも、まともな著者によるサイトも出てきません。流行りの対話型 AI ですら、まともなプロンプトを使えないと使いこなせません。なので、そもそも初学者がネットや ICT を使って探究するのは難しいことなのです。一方で、図書は著者(分野の専門家)と編集者によって体系的にまとめられています。あるいは図書館は分野の図書が体系的にまとめられています。「まだテーマは決まっていらないけど、○○という分野について学びたい」という漠然としたユーザーの問いに、図書や図書館は丁寧に付き合ってくれるんですね。つまり、探究学習における生徒のテーマの「いたりきたり(=学習過程)」に付き合ってくれるのが図書や図書館なのです。

そうした学習の面白さは、体験したことが無い生徒や、知らない先生にはわからず、「コスバ悪う」の一言で片づけられてしまいます。そこは授業者自身が、こういった学習のよさを知っていて、授業カリキュラムに組み込めるかどうかですよね。だから、清教学園の場合は「半年間は図書だけ使う(テーマがぼんやりしているため)」「半年後からネットも解禁し、自分に必要な情報をコスバよく探す(テ

マがある程度決まってくるので、キーワードも自分でわかる)」というふうに分けています。そうした意図的な授業設計ができるかどうかは、結局のところ授業者の教育観と、カリキュラムを組むだけのリソースがあるかどうかかなど。以前にも紹介しましたが、探究学習や図書館・Web 探索に関する授業者の意識と、学習者の意識をそれぞれ取材調査したことがありました。→(山崎勇氣(2022)『どのような探究カリキュラムが学校図書館活用を促進するか』) これは本校の例ですが、全国的におなじ状況だと思っています。

※上記山崎さんのコメントを読んで、以前こんな図を書いたのを思い出しました。「探究学習」という教育方法は、いってみれば「自ら課題を見つけるための支援」に尽きるのかもしれませんが。対話やら資料提供やら手間暇かかりますが、見つけてしまえばあとはほぼ勝手に旅を楽しんでくれます。

出典リンク→[片岡則夫 \(2012.4\) 「高等学校:調べ学習の手順 学習局面に応じた援助が学校図書館を育てる」学校図書館,通巻第 738 号](#)



【ライブ配信中にチャットで頂いた質問やご意見】

先生方が博識で、生徒達の調べたい事が何の研究なのかを正確に繋げているのが素晴らしいなあと感じます。得意分野なら、方言研究、役割語など思いつくと思うのですが、様々な分野でどのように専門分野と繋げていらっしゃるのでしょうか？

言語学研究だと語彙とか音韻とかの分析だと、けっこう専門的な手法が必要になるのかもしれませんが、中高生が取り組める言語学研究というのは、どういうものなのでしょう。

※そう言われてみると、「どうやってつなげるんだろう？」と一瞬思いました。が、考えてみると図書館という装置はいつだって「調べたいことと専門分野とつなげる」機能を持ち合わせているのですよね。たとえ私のような言語学素人でも、件名で探っていけばそれなりの本棚に巡り合えるのですから。ただし、「正確」かどうかは定かではありません。百発百中なんてとんでもなくて、生徒と教師とそして司書が手探りしながら、ああでもないこうでもない言い合って、毎回どこかにたどり着いているんだと思います。山崎・南・片岡みな得意分野はありますし、「ひろば」にはまだ顔出ししてませんが) 司書のみなさんレファレンスの手練れですから。そういう意味で司書さんにお話伺う回があってもいいのかな？

「専門分野とつなげる」「専門的手法」について、もう一つ思いついたのは(これは最強ですよ!)、さっさと手紙を書かせて「直接専門家に学びに行く」ですそう、たとえば「厨二病」を題材にした生徒がいたんです。「厨二病」?…目にしたときは「こんな一体どうすんの?」と、思案投げ首。結局は心理学者さんに大変お世話になりました。ちゃんと心理学のことばで論文書いたんですよ。こうなればもう、なんでもこいというか、ひとの禪で相撲を取るといいますか(‘◇’)ど。

★いろんな分野の知識は、もちろんまんべんなくあると使えることが多いですね。ただ我々もなんで

もかんでも専門家というわけではないので、やっぱり片岡先生仰るように図書館の機能(体系的に整理された資料組織群)に繋がられるのがこちらの仕事だと思います。

とはいえ、探究(≒研究)の名を冠する以上、あらゆる分野で分析する際にベースとなる手法などは、もちろん備えておいた方が良いでしょう。学術的に専門性高いものをやる必要はなく(中高生です)、その基礎の考え方があればいいのかなと。ライブ配信で紹介した言語学研究の手法は、そうした基礎的な分析手法は少なくとも押さえていました。授業で使用している説明と、中学生の実際の例は下図のようなものです。

プロジェクトの基本原則

- モノサシ(尺度)を決める
- データを集める
- 比べて分析する

モノサシ(尺度)を決める

棒の長さは？

「国際単位系」で決められた尺度(m/cm)を各機関が採用しているから計ることができる

計る

| | 1代目 | 2代目 | 3代目 | 4代目 | 5代目以上 |
|----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 男子 | 11 | 21 | 33 | 24 | 7 |
| 女子 | 0 | 0 | 6 | 17 | 73 |

現在の筆箱は何代目？(男女別割合)

比べる(例：性別で)

実験調査：目前の現象を計測する

例) パッケージデザインは味覚にどのような影響を与えるか
コンビニで購入した缶詰×4のラベルを剥がす
自分で二種類のラベルを作成し、缶詰に貼り付ける
同じ味だとは伝えず、何人かの人に試食してもらう
どのように味が変化したが、学術論文の尺度を基準に、食べた人に評価してもらう。

実験や観察によって、「○○だったらどうなるか」を確かめ分析する

社会調査：市井の人々への取材

例) 野球部員は新品のグローブをどのように育てていくか
購入して直後に行うカスタマイズ / 日々のメンテナンス
自分のグローブの特徴 / プレーの影響による形状変化

例) 中高生はカフェチェーン店に何を求めているのか
滞在時間 / 目的(飲食?居場所利用?) / 利用人数 / 利用頻度
いちどの利用で使う金額 / よくいく店舗とその理由

取材によって共通項や相違を導き出し分析する
「なぜ」「どのように」といった問いの答えを探る

観察調査：目前の現象を計測する②

例) 話者の人数によって発生する「笑い」の種類を調査
友人数名に依頼し、日常会話の内容を録音させてもらう
2名で会話した時の「笑い」はどんな種類が多かったか
3名以上の「笑い」にはどんな種類が多かったか

苦笑 / 嘲笑 / 爆笑 / ほほえみ …etc.

実験や観察によって、「○○だったらどうなるか」を確かめ分析する

こうしたポイントを押さえつつ、そこそこ色々な分析に挑戦しています。統計だと検定ができてないとか、実験の状況を整えられていないとか、色々なツッコミどころはありますが。そうした専門的な分析は、それこそ高等教育(大学)でやるべき仕事で、中高は「自由研究」の延長でいいんじゃないでしょうか。

【リスナーに紹介して頂いた資料】

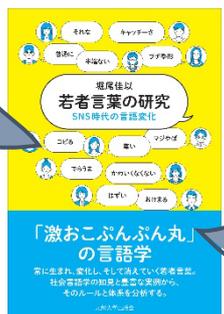


リスナーのおすすめ本②
『オノマトペの謎』はおすすめしています。副題の「ピカチュウからモフモフまで」に惹かれる生徒もいます(笑)

リスナーのおすすめ本①
日本語学会 編『日本語探究のすすめ』(大修館書店)。国語の授業と探究の授業で何かできそう。



リスナーのおすすめ本③
堀尾佳以「若者言葉の研究」も面白かったです



清教学園に所蔵がなかったので買ってみました！いい本をご紹介いただきありがとうございました m(_)_m